

## 選ばれる 事業者

取材：シニアライフ情報センター

# “やりたいこと”を できるだけかなえたい

## 住宅型有料老人ホーム 「生活クラブ風の村サポートハウス光ヶ丘」 — 千葉県柏市 —

有料老人ホームには、「住宅型」と「介護付」がある\*。「住宅型」は元気な人向け、「介護付」は要介護者向けとのイメージをもつ人は多い。だが、現実には「住宅型」の入居者は、「介護付」よりも要介護者の割合が高い。そのうえ、「介護付」よりも費用が割安なところが多く、入居者のQOLの点で問題のあるホームも少なくない。

そうしたなか、「自分が住みたいと思える施設をつくる」をモットーに掲げる事業者もある。社会福祉法人「生活クラブ風の村」（理事長＝池田徹氏）が運営する、住宅型有料老人ホーム「生活クラブ風の村サポートハウス光ヶ丘」を訪ねた。



比較的元気な入居者の多い参番館のリビング



## 大胆なケア改革で 苦難の時代を乗り切る

法人の名称である「生活クラブ風の村」は、「多くの人がそれぞれ、また去っていく、そんな場所でありたい」という思いが込められたネーミングだ。生協として全国で初めて介護事業を開始した、「生活クラブ生協・千葉」から派生した。

2000年には個室ユニット型特養ホームを開設し、全国的に大きな注目を浴びた。だが、理事長の池田さんによると、その後苦難の時代が訪れる。施設長にマネジ



ショートステイでは中国人女性が実習中

メント能力がなかったため、入居者主体の名のもとに、個々の職員主体のケアが横行し、「入居者の皆さまには申し訳ない時期が続きました」というのだ。

その後、現場職員を巻き込む大胆なケア改革を経て、現在は千葉県内7カ所で、高齢者施設、障害者施設などを含む多機能複合拠点運営する。

住宅型有料老人ホーム「生活クラブ風の村サポートハウス光ヶ丘」(以下、サポートハウス)の39の居室は、3つの館に分散している。老番館には訪問看護ステーション、定期巡回随時対応型訪問看護看護ステーション、式番館には事務所、参番館には小規模多機能型居宅介護事業所と居宅介護支援事業所を併設する。

同じ敷地内には、ショートステイ事業所と訪問介護ステーションが入る四番館や、認定NPO法人VAICコミュニティケア研究所柏センターの建物もある。いずれも平屋で、駐車場をコの字型に囲むように配置されている。

こうしたゆったりとした環境は、入居者の自由な暮らしを支える一つの要素になっているように見える。

## 職員みんなで見守り 入居者を見守り

サポートハウスでは、これまで玄関に鍵をかけない方針をとってきた。認知症で外に出たがる人についても、「認知症の人って、手持ち無沙汰が苦手なんです。だから外に出たい人がいたら、一緒に外に出て5分、10分つきあうと落ち着くんです。外に出て行きたくない人がいたら、行けばいいじゃない」と、「光ヶ丘」全体の事業を統括する施設長の梅津直美さんは話す。

この住まいの環境に慣れてくると、自然に遠出をしなくなる。また、ある程度自立されている方で、行き先に見当がつく場合は、「出かけてもさほど困らない」とおほかだ。サポートハウスは「住宅型」なので、看護・介護職員に関する人員配置基準はなく、人手は少ない。「光ヶ丘」では、管理者と生活相談員、施設全体の見守りを行う1人のほか、併設の定期巡回随時対応型訪問看護が無線で連絡し合い、事務、清



地域住民も参加するクリスマス会

掃、調理の人たちも含めて、入居者の見守りをしているのが特徴である。「光ヶ丘」全体の職員のチームワークがよいのだ。

ケアマネジャーの岸本亜由子さんと池田ゆり子さんは、「住宅型」やサービス付き高齢者向け住宅では、認知症や要介護度が重くなると退居を求められることが多いことについて、「認知症が重くなるとからみられないという感覚がわからない。『なぜみられないの?』と思ってしまう。だって自宅で見ることができない人が来ているわけだし。外に出ていっちゃったり、大声を出して怒ったりする人もいますよ。でもそうした行動をとるには、絶対何かしらの理由がある。





秋祭りでは職員有志による太鼓の演奏や、焼きたての秋刀魚を楽しむ

入居者の平均年齢は88歳で、要介護1、2の13人、要介護3の11

## 「トイレでの排泄」 守るべき尊厳

『どうしてこの人は怒るの?』とみんなで考えて対応すればいいだけ』と話し、不思議そうに顔を見合わせる。

ただ最近では、「式番館で、職員がちょっと目を離れたときにスリット外に出てしまう人がいて、何度も警察のお世話になった。今は式番館だけ鍵をかけている」と入居者の行動を制約せざるをえない苦渋の対応に顔を曇らせた。

人、要介護4、5の13人が暮らす。ここでは、入居者一人ひとりの生活リズムをつかむため「生活リズムチェックシート」をつけている。通常は起床、食事、排泄ケアを中心に記録する。

だが、夜間眠らない等、生活に何らかの支障が出たときには、まずその人の生活リズムを詳細に把握するため、昼間寝ている時間はないかなど、通常よりも細かく生活リズムをチェックする。その結果、昼間も寝たり起きたりを繰り返し、夜間も同様のリズムである場合や、日中の生活リズムが正常で夜間目覚めるような場合は、安易に睡眠剤の処方依頼したりはしない。

トイレに行きたいと思う人に

は、たとえ危なっかしく見えたとしても、リスクを予測し環境を整える。福祉用具業者、リハビリテーション職、ケアマネジャー、サポートハウス施設長ら関係者が居室に集まり、自力でトイレに行けるよう、手すりを設置する位置などのシミュレーションを繰り返し返す。「住宅型」のメリットは、本人の意欲や身体状況にあわせて、その人の願いをかなえる福祉用具を柔軟に利用し、不要になれば返せることだという。

「もし自分だったら、自分の親だったら、どうしたいかなど考えて。だって、ここに入ったら多少なりとも制約のある生活になるでしょう。だからそのなかで、いかに快適にやりたいようにやれるようにするのが、私たちの仕事」と岸本さんと池田さんが頷き合う。

生活クラブでは、「トイレに座る」ことを高齢者支援「10の基本ケア」の一つにしている。これには、「人間の守るべき尊厳は『トイレで排泄することから始まる』とあり、具体的な内容が記されている。①日中ケアはおむつを外し、布パンツとパッドで過ごす、②留意・尿意のサインを読み取りトイレに誘導する、③食事の改善で「下

剤は廃止」をめざす、④便を肌につけたままの介護はしない、⑤排泄中、介護者は離れる、⑥自宅でもおむつをやめる学習会を行う、の6つである。

## 介護と看護の連携で 地域での看取りを推進

サポートハウスの職員に看護職はいない。看護サービスが必要とする人の多くは、併設する訪問看護ステーションや定期巡回随時対応型訪問介護看護サービスを利用する。

副施設長で訪問看護師の春山ともみさんによると、誰でも「穏やかに逝く力」をもっているのを、それを上手に引き出すことを心がけているそうだ。ある時点を境に、本人の残存能力を保つケアから、体力の消耗を抑えるケアへ転換する。そのタイミングを見極めるのが看護職で、以降は介護職に「寝心地のいい場所にしよう。本人は楽だと思おう?」と話しかける。

病院での死は孤独でむなし。だから、やむを得ず入院しても、できるだけ早く生活の場であるサ



# 選ばれる事業者

社会福祉法人生活クラブ風の村

住宅型有料老人ホーム

「生活クラブ風の村サポートハウス光ヶ丘」



写真は式番館

- 開設年月日 2012年4月1日
  - 所在地 〒277-0061 千葉県柏市東中新宿4丁目5番12号
  - TEL 04-7199-2218
  - 定員 39人: 沓番館12部屋、式番館15部屋、参番館12部屋
  - 居室面積 18.24~18.60㎡
  - 共用設備 食堂、浴室(個浴)
  - 費用 入居一時金として、沓番館90万円、式・参番館120万円  
家賃: 沓番館6万5000円/式・参番館7万8000円  
共益費: 1万5500円、管理費: 4万9500円  
食代: 朝食400円、昼食600円、夕食700円
- |           |  |
|-----------|--|
| 月額<br>利用料 |  |
|-----------|--|
- 併設施設 訪問介護ステーション、訪問看護ステーション、小規模多機能型居宅介護、定期巡回随時対応型訪問介護看護ステーション、ショートステイ事業所

ポートハウスや自宅に戻ってきてほしい、と考える。少し前まで、看護師を含めて「亡くなるのは病院でいいんだ。それが当たり前前」という空気があり、救急車を呼び搬送することも多かった。

春山さんは、「死ぬのはよくないことだから、死なせちゃいけない」との誤解がある、という。看取りの経験のない介護職員は、人が死んでいくのを見たことがなく、知らないから怖がる。だからターミナルの人から逃げず、居室

にこまめに通うようながし、成体験を積んでもらう。

ターミナルを迎えると人の気持ちは変わることもある。たとえば、自宅で老々介護をしていた夫婦のケースでは、認知症の妻を介護していた夫が疲弊し、腰を痛めて入院したのを機に、それまで「最期まで自宅がいい」と話していた妻がショートステイを利用するようになった。すると、「夫と離れた生活は気が楽」と、ショートステイが居心地のいい場所となり、そ

こで手を取り合うなかで夫が妻を見取ったという。さまざまな看取りがあつていいのだ。

ショートステイや小規模多機能型居宅介護でも退院後の人を受け入れる。介護、看護、医療が連携してターミナル期を支え、看取りを行っている。

## 「困っている人」を支え切る取り組み

式番館の隣に建つ認定NPO法人VAICコミュニティケア研究所(VAICCCI)柏センターには、コミュニティスペースがある。VAICは、「生活クラブ・ボランティア活動情報センター」の略である。「生活クラブ生協・千葉」を母体とするVAICCCIは、相談機能とシンクタンク機能をあわせもつ組織で、地域共生社会をめざし、地域で支え合うネットワークづくりを推進している。

柏センターでは、サポートハウスの利用者を対象に月2回「喫茶クレヨン」を開き、小規模多機能型居宅介護に料理などを届ける。また、地域の人の誰もが集える居

場所づくりとして、曜日を決めて、ランチの提供、麻雀教室、絵画やヨガのサロンなどを「よってつて事業」として行う。いずれも地域のボランティアの人たちが中心となつた活動である

兄弟組織である「生活クラブ風の村」とVAICCCIでは、地域包括ケアシステムを、目の前にいる「困っている人」を支え切ることを考えている。それぞれの組織の特徴を生かした役割分担と連携で、「生活クラブ安心システム」の構築などに取り組む。こうしたシステムが身近にあることは、地元の人たちにとっても心強い。高齢者の住まいを中心とする「光ヶ丘」全体が、地域に根づいた拠点となつているといえるだろう。

(平岩千代子)



コミュニティスペースで行う味噌づくり